

ラフカディオ・ハーン作品における霊の表象について

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): Lafcadio Hearn, Watsuji Tetsuro, Ningyo-no-Haka 作成者: 茶谷, 丹午, CHATANI , Tango メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00049489

ラフカディオ・ハーン作品における霊の表象について

人間社会環境研究科 博士後期課程2年

茶 谷 丹 午

要旨

本稿ではラフカディオ・ハーンにおける二つの文学的表象、青空と霊を取り上げる。これらは彼の紀行文や幽霊物語だけでなく、思弁的な内容のエッセイにも現れるものである。彼はこの二つの表象を用いて、人間における個人性を否定する議論を展開する。ハーンは言う。人間のうちには無数の死者すなわち霊が存在しており、人間とはいわば集合体である。また人間にとって、青空をみて憧れ、自分が青空に融け入り、いまある個人的な自己を失うことを願うのは、賢明であり合理的である、と。しかしその一方で彼は、他者との倫理的関係を結ぼうとする主体としての「私」を認めているようでもある。ハーンのエッセイは夢想的であり晦渋でもあるけれども、その目指すところはおそらく人間存在の二面性の把握にあるのであり、その点で彼は和辻哲郎の立場に近いように思われる。そこで試みに和辻倫理学を補助線として用いて、幽霊の登場する作品の一つである『人形の墓』を分析し、そこからハーンの哲学的議論における霊と、文芸作品における霊との連続性を考察する。

キーワード

ラフカディオ・ハーン, 和辻哲郎, 人形の墓

Representations of the Ghost in Lafcadio Hearn's Writings

CHATANI Tango

Abstract

This paper focuses on the ghost and the blue sky, the two literary representations we frequently find in the writings of Lafcadio Hearn. They not only appear in his travel pieces and ghost stories, but they also have key roles in his philosophical discussions. In his essays, Hearn denies individuality of the man with paradoxical expressions. According to him, there exists within us a multitude of ghosts, and the living being is nothing but a composite. He also maintains that it is wise and reasonable to aspire to melt into the azure summer sky and thus to become one with it. However, he seems to approve the *Self*, which has its own will to form ethical relationships with others. Hearn's essays look dreamy and obscure, but their aim is to grasp these two aspects of human nature. On this point, Hearn's ethical thought is close to that of Watsuji Tetsuro. This paper analyzes one of Hearn's ghost stories, *Ningyo-no-Haka*, within the context of Watsuji's ethics, and inquires into the internal relationship between the philosophical ghost and literary ghost in Hearn's text.

Keyword

Lafcadio Hearn, Watsuji Tetsuro, Ningyo-no-Haka

1.

ラフカディオ・ハーンが色彩描写を多用することはしばしば指摘されるが、とりわけ彼は青色に心惹かれていたようである。たとえば『仏領西インドの二年間』(Two Years in the French West Indies, 1890)では、船旅が風景のなかにある青色の発見と共に進む。メキシコ湾の海はそれまで見たことのない青さをみせ、作者を驚かせる。彼はこれ以上の青い海はあるまいと思うが、翌日にはさらに青い海が広がる。この辺りの文章は、西インドという異世界へ入ってゆくことと、青色の新しい感覚の発見とが重なり合い、読者は旅の進行を辿りながら様々な青の表現を楽しむことができる。

この西インド諸島への旅で見た海は、後年『異国風物と回想』(Exotics and Retrospectives, 1898)所収の「青の心理学」(“Azure Psychology”)の中で触れられている。そこでは、熱帯地方の強烈な青を見たときの歓喜の記憶が、青という色がつねに快さをもたらす性質をもつものであることの、証拠の一つとして挙げられているのである。ハーンはさらに次のようにいう。青は神聖の色であるけれども、それが喚起する感情は、もっぱら嬉しさ (gladness) と優しさ (tenderness) であって、青は神々や死者のことを連想させるが、彼らの恐ろしさを語ることはない、と。¹⁾ また彼は、この作品の中で、青を「神性の観念の色、汎神論の色、倫理的な色」(the color of the idea of the divine, the color pantheistic, the color ethical)²⁾ であるとも言っている。

このようなハーンの物言いには、単なる青色の分析以上のものが感じられるように思う。青を目にした際、人が「うれしさ」や「やさしさ」の感情を経験するというのは、分かりやすい主張であり、青のもつ性質の話として受け入れることができる。しかし、青が、恐ろしさをもたぬ神々や死者を連想させるというさらなる主張を読むとき、読者の多くは、著者が青にかなり独特の意味を与えているような印象を受けるだろう。そして、そ

の印象が正しいとすると、彼がそれをしたことの原因が問題となるだろう。或いは「神性の観念の色、汎神論の色、倫理的な色」と、並べられる理由が問題だと言ってもよいだろう。ここでは青が喚起する感情という内面的な話から、青が連想させる神々の存在、その神々のもつ倫理性の話に、エッセイの焦点が移りつつあるように読めるからである。

青に関するハーンの主張を要約すると、次の二点になるように思う。一つは、青がわれわれに常に喜びを与えるということである。もう一つは、青が優しさに満ちた、倫理的な神々や死者を想像させるということである。しかしこの二つの結びつきを考えると、少なくとも二点目に関しては、あくまで感情としてまずは考えるべきかもしれない。青が倫理的な感情を喚起し、その感情の中である種の神々や死者がおのずから想像されるという風に、ハーンは言うに止めているからである。けれども、青が倫理的な感情を呼び起こすということが、すでに分かり難いのではないか。しかも、青は同時に喜びの感情を呼び起こすという。一体なぜ、喜びの感情と倫理的な感情との二つが、青という色を介して結びつけられなければならないのか。熱帯の燃えるような青の海がもたらす強烈な歓喜は、どのようにして倫理とつながるのだろうか。

2.

ハーンの中での、青色がもたらす喜びの感情と、青が倫理的な色であるという事との関係を考える場合、『異国風物と回想』の中にある「月がほしい」(“Of Moon-Desire”)という作品が参考になるように思われる。この小品は、お月さまを取ってほしいと自分の子供に言われたというエピソードから始まる。この他愛のない願いについてハーンは考える。大人は月を取ろうとする子供の愚かさを笑うが、はたして笑うことができるだろうか。大人もまた同じように愚かな願いを抱いているのではないか。たとえば、個人としての「私」の永続を

願っているのではないか。ハーンはそう言った後、一つの回想をする。

I remember when a boy lying on my back in the grass, gazing into the summer blue above me, and wishing that I could melt into it, — become a part of it. [...] And my imaginings presently led me not only to want the sky for a playground, but also to become the sky!³⁾

子供の頃、草の上で仰向けに寝そべって、夏の青空を眺めていた事を覚えている。その時、その青空に自分が溶け入りたい、空の一部になりたいと願っていた。(中略)そして私の空想はやがて私に空を遊び場として欲しがらせるだけではなく、空そのものになりたいと願わせたのである。⁴⁾

ここでハーンは、青空になりたいという願いを抱いていた少年時代の愚かさを語っているわけではない。個人としての自己の永続というような愚かな願いとは正反対の、賢明な願いとして、この夢想を語っているのである。彼は、当時の自分がそれと気づかずに真理の近くに立っていたのだという。ここから作品は思弁的な色合いを深めてゆく。

I mean the truth that the wish to *become* is reasonable in direct ratio to its largeness—or, in other words, that the more you wish to be, the wiser you are; while the wish to *have* is apt to be foolish in proportion to its largeness. Cosmic law permits us very few of the countless things that we wish to have, but will help us to become all that we can possibly wish to be. Finite, and in so much feeble, is the wish to have: but infinite in puissance is the wish to become; and every mortal wish to become must eventually find satisfaction. By wanting to be, the monad makes itself the elephant, the eagle, or the man. By

wanting to be, the man should become a god.⁵⁾

私が言いたいのは次のような真理である。即ち、何かになりたいという願いは、その大きさに正比例して合理的である。換言すれば、何かになりたいと諸君が願うほど、諸君は賢いという事である。これに対して、何かを所有したいという願いは、その大きさに応じて愚かなものである。宇宙の法則は、我々が所有したいと願う無数の物のうち、ほんのわずかなものしか与えてくれないが、我々が或いはなればと願うすべてのものに、我々なることを助けるであろう。所有への願いには限界があり、それだけに弱々しい。しかしなりたいという願いは力において無限である。そして、死すべき存在が抱く、何かになりたいという願いはすべて、遂には満たされる筈である。なりたいと願うことで、モノドはそれ自身を象にも、鷲にも、人間にもする。そして人間も、なりたいと願うことで神になるだろう。

ハーンは言う。人間の抱く願いには二種類ある。一つは「何かを所有したいという願い」(“the wish to have”)であり、もう一つは「何かになりたいという願い」(“the wish to be”)である。そして、前者の実現には限りがあるが、後者は必ず実現する。これは逆説的な議論というべきだろう。常識的には「何かになりたいという願い」の実現にこそ、限りがあるからである。しかしハーンによれば、われわれは個人的な生を超えて何かなる願いを、必ず達成できる。つまり彼は、個人性を超える「私」があるのだと考えている。その「私」とは何か。それは「何かを所有したいという願い」の愚かしさを、われわれに気付かせるような「私」であり、倫理的な生のあり方と深く関係する。そのような解釈が自然であろう。二種類の願いを対比し、一方の願いは大きければ大きいほど“reasonable”だと言い切ってみせる、この文章の弾みに、彼の倫理的な生への強い希求が

見て取れるように思われる。

このように青空への融合・合一への願いが人間にとって喜びを覚える本来的なものであるという点から、ハーンは人間における個人性の否定を行ったわけであるが、彼の主旨をよりよく理解するため、『仏の畑の落穂』(*Gleanings in Buddha-Fields*, 1897)の「塵」(“Dust”)という作品を取り上げたいと思う。このエッセイは、著者が散歩の途中、子供たちが虫のお葬式ごっこをしているのを見るところから始まる。ハーンは人間の生死について物思いにふける。いま目の前に広がっている景色は、一切がまぼろしであり、たしかに存在するのは一切をやがて呑み込む大地である。人間は死んで塵となり大地に呑み込まれねばならない。しかし、大地から一切の生命が生まれるのも、また確かなことである。塵は大地と同様、永続的な存在であり、しかもそれが生命を構成する以上、塵もまたただの物質的存在ではなく、各々が感覚をもっていると考えられる。個人の生死に際しておきるのは塵の離合集散にすぎず、塵そのものが滅することは無いのだから、我々が死を恐れねばならぬ道理はない。そう論じた後、次のような一節があらわれる。

*I an individual—an individual soul! Nay, I am a population—a population unthinkable for multitude, even by groups of a thousand millions! Generations of generations I am, aeons of aeons! Countless times the concourse now making me has been scattered, and mixed with other scatterings. Of what concern, then, the next disintegration? Perhaps, after trillions of ages of burning in different dynasties of suns, the very best of me may come together again.*⁶⁾

「私」とは個人である——個別的な魂である！いな、私とは群衆である——その多さといったら、数十億の集団を単位としてすら考え得ないほどの群衆である！私とは、果てしない期間に渡る、幾世代もの人びとである。

現在、私をなしている集合は、数えきれないほど何度も離散せられ、他の離散物と混淆せられてきた。してみれば、次に起こる解体を何で案じることがあろうか。恐らく、私の最善のものが、様々な太陽の王朝において、何兆もの時代のあいだ燃え続けた後、ふたたび一緒になるかもしれない。

ここでは個人としての人間の実在性に関する疑問が述べられる一方で、無数の塵が向上を遂げてふたたび個人として集合することへの希望が語られている。つまり個人性は単純に否定されて終わっていない。個人性は否定されるが、個としてしか存在しえないわれわれの生を肯定しようとする意志があるように読める。それはこの一節に続く作品末尾の部分によって明瞭になる。

ハーンはこの作品の最後に、生の意味を問う。「どこから」(Whence)とか、「どこへ」(Whither)という問いに比べて、「なぜ」(Why)という問いは、回答が難しいと言った後、少女が幼い弟を相手に「人」という文字を教える姿に目を向ける。少女は「人」を地面に書いたあと、長さの異なる木切れを二本取り上げて、互いに支えあうようにして立ててみせ、人間というものがお互いに支えあわなければ存在できないのだと弟に語る。ハーンは、少女の言葉は言語学的には間違いだけでも、あらゆる宗教の本質とあらゆる哲学の最良部分に通ずるものがあるという。⁷⁾

ここにおいて読者は、ハーンの関心が、相手を愛し助け、また相手に愛され助けられることをその本質とする、「人」のあり方であることを知る。そして、それまでの一種哲学的な議論は、そのような倫理的問題意識から発するものであることに気づくのである。

3.

ハーンの思想面を考察するための補助線を得るべく、本稿では和辻哲郎(1889-1960)の倫理思想を取り上げてみる。和辻はハーンを直接論じて

いないようであるが、両者の比較はおそらく可能である。ハーンはすでに見たように、人間の個人性否定の議論を行ったわけだが、和辻の方は近世哲学における個人主義思想への批判から自己の倫理学を作った人である。二人は個人主義批判という点において共通していると思われる。また、日本の倫理の考察を通じて一般的な倫理問題を解こうとした点でも似ていると言えよう。

3. 1.

『倫理学』の序論⁸⁾において、和辻は自己の倫理学の立場を要約している。和辻はまず言葉の検討から話を始める。彼は「倫理」「人間」「世の中(世間)」「存在」の四つを取り上げているが、ここでは「倫理」「人間」の二つの検討を紹介したい。

「倫理」の「倫」は「なかま」を意味する。ところで個人は関係の中で資格を得るゆえ、「倫」は一定の行為の仕方、秩序の意味を含む。そして「理」の字は、この秩序の意味を強めるために加えられた。したがって「倫理」はすでに出来上がっており、当為(Sollen)の意味を持たないはずである。しかるに共同存在はその根柢に信頼を持つとはいえ、信頼を外れる行為の可能性は常にあり、従って共同存在は常に破滅の危険を蔵している。しかも人間は常に共同存在を目指す。倫理は単なる当為でなく、すでに有るのだが、また単に有るのではなく、無限に実現されなければならない。

次に「人間」は、元来「よのなか・世間」の意味だった。それが仏典の訳語の事情からやがて人を意味するようになった(輪廻観において衆生の巡る世界のうち、「畜生界」にあたる原語を「畜生」と略し、「人間(じんかん)」と絶えず並べて用いられたため)。これは歴史的偶然であるが、体験が言葉の転用として表現されたとみられる。人間は単なる世の中でもなければ、単なる人でもなく、二重性格をもつ。

このような分析の後、和辻は人間が関係性を離れては存在しない事をあらためて強調する。しか

もこの関係性とは、すでに出来上がっていて個人がそこに完全に吸収される様なものでもない。関係性の破壊・欠如の可能性がある一方で、関係性を結ぼうという動きもある。和辻は倫理を動的に捉える。個人と全体との関係は動的であるという。その運動は否定の運動である。

だから人倫の根本原理は、個人(すなわち全体性の否定)を通じてさらにその全体性が実現せられること(すなわち否定の否定)にはかならない。それが畢竟本来的な絶対的全体性の自己実現の運動なのである。かく見れば人倫の根本原理が二つの契機を蔵することは明らかであろう。一つは全体に対する他者としての個人の確立である。ここに自覚の第一歩がある。個人の自覚がなければ人倫はない。他は全体の中への個人の棄却である。超個人的意思あるいは全体意志の強要と呼ばれたものも実はこれであった。この棄却のないところにも人倫はない。⁹⁾(傍点原著者)

このような倫理観、人間観を踏まえて、さらに和辻は倫理を学として扱うことの特異な事情に注意を促す。あらゆる学問がそもそも、人間の関係性を暗々裏に前提としている。デカルトのいう孤立的自我ですら、その問題を共有する学者たちを想定しなくては問いとならない。関係性から離れた観察者としての孤立的主観は、客体的な自然と向かい合う時にはさほど問題とならないが、対象が人間となれば明らかに無理が生じる。人間は関係性において存在し、また把握されるものであって、孤立的な主観による観照は役に立たないからである。その人間もしくは倫理は、日常における無自覚な表現としてすでに与えられている。倫理学はそれを取り上げればよいが、しかしその表現を自ら生きなおすことで把握し直す必要がある。

3. 2.

人間における個と全体の関係への和辻の洞察は、ハーンを読む場合に助けとなるのではない

か。和辻のいう個と全体のあいだの動的な関係、否定の運動による関係は、ハーンのいう人間の本质、つまり無数の塵（過去に生きていた存在）の集合体でありつつ、それ自体が一個の存在であるという考え方と、同じことを言っている可能性がある。ハーンのエッセイは仮説と夢想を多用して、一見とりとめなく思えるが、死者の集合としての複数的な私と、自らの願ひ（意志）をもつ単一的な私との、二つの側面を併せ持った存在として人間を理解しようとする姿勢は、一貫しているように思われる。そして、そのような人間存在の構造を自覚的に把握することが、倫理においては必要だとする考えを、両者は共有しているようにみえる。それは和辻が「人間」という言葉を分析し、ハーンが「人」の字に関する少女の言葉を取り上げたというところに、端的に表れている。両者とも、言葉が人々によってどのように感じられているか、体験されているかという点に着目しているのである。

もっとも、和辻が「人間」を論じるほどには、ハーンは「人」を問題としていない。その代わりに、霊の話が前面に出てくる。しかも霊というのは、ハーンの実験では、必ずしも倫理的な存在ではない。『異国風物と回想』の「第一印象」(“First Impressions”)において彼は言う。人間が他人を見て瞬時に抱く好悪の感情は、お互いの中に潜む霊つまり死者たち (the Dead) に原因がある。人間同士が出会うとき、じつは死者の軍勢同士が対峙している。我々の他人への判断を支配するのは、このような超個人的な力であり、この力には獐猛野蛮な性質がある。しかし善美なるものも、この力によって生み出される。¹⁰⁾ また同書の「美は記憶なり」(“Beauty Is Memory”) で、ハーンは次のように言う。生者の恋は、生者の中に潜む無数の死者たちが、かつて自分たちの生きていた時に経験した恋を思い出すために生じる。しかし彼らを駆り立てるのは、じつは快適な生を約束してくれる優れた肉体への希求である。¹¹⁾ どちらのエッセイでも、ハーンの実験に対する倫理的評価は高くない。彼は霊の利己性を指摘するからであ

る。しかし、霊の利己的衝動は結局、霊自身ではない何かに奉仕する力として位置づけられている。また彼は、基本的に霊を超個人的な集合的存在として捉えているが、しかもその霊は個としての生者の面影を失っていない。本当の意味で恋をしたり、野蛮であったりすることは、生者にのみ許されるからである。要するに、ハーンの実験における霊の意味には曖昧さがあり、彼は霊そのものを論じているというより、霊という存在を仮定することによって、霊との関係において存在する人間を論じているように見えるのである。

4.

以上、和辻とハーンの実験を述べた。以下では和辻の実験を用いてハーンの実験解釈を行ってみたい。ハーンは『怪談』(Kwaidan, 1904) を書いたことでよく知られるが、彼の幽霊に対する関心は、若年期から晩年まで変わらなかった。では、怪談 (ghost story) を書く彼と、すでに見てきた倫理的意識の彼とはどのように繋がっているのだろうか。或いは、倫理的議論における霊と、怪談における霊とはどのように繋がっているのだろうか。この点を考察するため『仏の畑の落穂』から「人形の墓」(“Ningyo-no-haka”) を取り上げてみよう。これはエッセイ風であるが、怪談の要素も併せ持った作品である。

4. 1.

〈作品概要〉

門付けの少女をハーンと下男の萬右衛門が家に上げ、身の上話を聞く。イネという名のその少女は、かつて両親、祖母、兄、妹との六人で暮らしていた。父親は表具屋、母親は髪結いで、一家の生活に不安はなかった。ある時、健康な父親が病に倒れ、急逝する。八日後、もともと身体の弱かった母親も亡くなる。そのあと近所の人に来て、人形の墓を作るよう忠告する。人形の墓とは、同じ年に家で死人が二人出た場合、三人目が死ぬことを防ぐ目的で作るもので、藁人形を身代りに用

うのである。その土地の風習であったが、少女の兄は彼らの忠告通りにすべきことを認めつつ、すぐに墓を作る事に着手しなかった。

少女の兄は判子職人の修行を終えたばかり。彼は腕がよく、友人達の協力もあり、初めての収入は多かった。しかし彼も病に倒れる。彼は病床で母親の霊と話し出す。母が自分の袖を引っ張っている、お前たちにも見えないか、などと譚言をいう。その状態があまりに長く続くので、少女の祖母は霊に怒って床を踏み鳴らし（兄によれば母親はその時床下に隠れていた）、非難の言葉を浴びせる。私達は生前のお前に優しくしていただではないか。いま彼を奪えばこの家が終わる、それは恥ずべき行いではないか、と。しかしその言葉も空しく、少女の兄は亡くなる。丁度、母親の四十九日であった。残った三人は親類の家に身を寄せるが、祖母は冬の夜中、誰にも気づかれずに亡くなる。その後、姉妹は別々に引き取られる。妹は父親の友人の畳屋で大切にされ、学校にも通わせて貰っている。

話を終え、少女がお辞儀をして立ち上がる。ハーンが見送りのため彼女の坐っていた場所に腰を下ろそうとすると、少女は下男に仕草でなにか注意を促す。下男はハーンに、少女が彼に畳を叩いてから坐ってほしいと言っているという。ハーンがその理由を訊ねると、下男は、人の身体で温まった場所にそのまま坐れば、その人の不幸を取り込んでしまう、そう少女は信じているのだと答える。ハーンはそれを聞き、畳を叩かずに坐る。ハーンと下男は顔を見合わせて笑う。下男は少女に、旦那様はお前の不幸を背負いたい、他人の苦しみを理解したいと思っている、だから心配しなくともよいと言う。

4. 2.

「人形の墓」については、牧野陽子氏がかなり踏み込んだ解釈をしている。¹²⁾ 氏の考えでは、少女の家庭は裕福であり、両親亡きあとの兄の収入も多く、兄は経済的余裕が十分あった中で墓を作らなかった。それは、彼が近代思想に影響され、

土着的信仰を軽んじる念が頭の隅にあったからである。続いて『心』(Kokoro, 1986)の「ある保守主義者」(“A Conservative”)における主人公の青年の例が引かれる。彼は武士の子であるが、欧米列強の力を前にして西洋文明に傾倒し、キリスト教に改宗する。しかし実際に欧米を巡る過程で、近代西洋文明の負の側面を知る。そして青年は年老いて日本に戻り、精神的にも日本回帰をする、という物語である。これと「人形の墓」には共通した主題があるという。

物語のなかで、“He (彼)”とよばれる主人公の人生は、旧い日本の否定、西洋への傾倒、挫折と苦悩をへて、その後の日本回帰という、日本近代の精神遍歴のひとつの典型的なパターンをよく表している。「人形の墓」の兄の行動も、身分の違いこそあれ、自らの意思で旧来の伝統・習慣に従わなかったという点で、エリート青年の物語のヴァリエーションといえる。ともに、明治日本の近代化途上の青春群像だといっても良いだろう。¹³⁾

さらには、作品の最後で下男が少女に掛ける言葉も、近代日本の問題に関連してくると牧野氏はいう。

“Iné,” said Manyemon, “the master takes your sorrows upon him. He wants” — I cannot venture to render Manyemon’s honorifics — “to understand the pain of other people. You need not fear for him, Iné.”¹⁴⁾

「イネ」と萬右衛門は言った、「旦那様はお前さんの悲しみをご自身に引き受けたいのだ。旦那様は」—萬右衛門の丁寧な言い回しを訳する事などできない—「ほかの人たちの苦しみを理解したいのだ。旦那様のことを心配する必要はないよ、イネ」

この下男の科白のうち、“you need not fear

for him,” という言葉には，“or, for yourself” という言外の意味があり，自らの運命を恐れなくともよいという意味が込められており，少女の運命と，西洋と遭遇した近代日本の運命とを，ハーンは重ねて見ていると，牧野氏はいう。

この解釈の妥当性について考えてみたい。まず一家に墓を作る経済的余裕があったかどうかであるが，少女の次のような言葉がある。

My brother was nineteen years old. He had finished his apprenticeship just before father died: we thought that was like the pity of the gods for us.¹⁵⁾

お兄さんは十九歳でした。お父さんが亡くなる直前に丁度修行を終えたのでした。それは神様のお恵みのように私たちには思われました。

この言葉から，両親が亡くなった後の一家において，経済的危機が強く意識されていたと理解していいのではないか。そして兄の収入が多かったのも，一家の危機を乗り越えるために張り切った故であると考えべきではないか。収入の多さに触れた少女の言葉は，兄の努力への敬意と，腕の良さへの誇りが混ざっているとも取れる。両親存命中の一家の生活が安定していたという話も，たんに裕福だったことを言っているのではなく，家庭がしっかりと存在していたことを，懐かしく回想している意味合いが強いのではないか。

次に，明治のエリート青年のヴァリエーションという説に関して言えば，「ある保守主義者」の青年に比べると，「人形の墓」の青年は内面がほとんど描かれていない。読者が知るのには，彼が墓を作らなかったこと，一家のため懸命に働いたこと，そして母親の幽霊を見ながら死んだことだけである。墓を作ることは一家にとって，単に経済的負担が大きかったにすぎないと考えられる以上，兄が墓を作らなかったことの原因を，彼の内面における近代思想の影響にまで求めるのは容易ではな

い。ましてや少女に近代日本の今後の運命を見る解釈は，さらに難しいと言わざるをえない。そもそも下男の言葉が「自分の運命を恐れなくともよい」という意味を言外に含んでいるという見方には，首肯しがたいところがある。下男は，辛い運命にあつてなお他人の身を案じることを忘れない少女のけなげな心を，いたわっているだけのようにも思えるからである。

もっとも，墓が作られなかった理由を，すべて一家の経済事情に求めることも，行き過ぎかもしれない。

My brother said they were right; but he put off doing what they told him. Perhaps he did not have money enough, I do not know; but the haka was not made.¹⁶⁾

お兄さんは，皆さんの言う通りだと言いました。でもお兄さんは言われた通りにするのを延ばしました。たぶんお金が十分になかったのかもしれないけど，分かりません。ともかくお墓は作られませんでした。

少女は，兄には金が無かったのかもしれないが，分からないと言っている。金銭事情とは別の真の理由があったことを彼女が感じながら，それに触れるのを避けている，言葉を濁している，と読むならば，牧野氏の解釈も不自然とはいえない。しかしここは，金銭問題が原因の一部であったことを感じている少女の，恥ずかしさゆえの曖昧な口調だとも考えられるだろう。そして，金銭的に苦しいことと，土俗的風習への若干の軽視が重なることは，自然なことでもあろう。しかし，そのような軽視を描くことにより，近代思想の影響下にある人物像を，作者は描きたかったのだろうか。そのような議論は不可能ではあるまい。しかしそのように論じることによって，この兄の，悲惨ではあるが美しくもある，その生のあり方の意味を，見落とす結果にならないだろうか。

4. 3.

兄は一家の危機状態を救うために働いたのだし、死ぬときは母親を見ながら死んだのである。母親の霊の存在をどう考えるにせよ、兄が母を想い続けていたことは確かである。これを、風習に背いたから霊に復讐されたのだと片づけてしまえば、彼の抱く母への想いが作品解釈から脱落してしまう。むしろ、人形の墓を作らなかったために、兄の母への想いの強さが表現を獲得したのだと言うべきではないか。彼の死は一家にとって悲惨な出来事だったに違いない。しかし、この小品の魅力がどこにあるかといえば、その魅力の一つは彼の奇怪な死にある。母への愛ゆえに、死に際して死を忘れるという、その死に方にある。

無論、その死は、一家を支える責任の放棄を意味するのだから、道徳的に正しいものではない。祖母による母親の霊への非難は当然である。だが、祖母の言葉が表すのは、霊に向けての怒りというより、無情な運命への絶望であろう。彼女の心を占めるのは、家庭が失われることの悲しみと、残された幼い孫たちの運命への嘆きである。少女は、そのような祖母の孤独な死を直接経験する。しかし少女は、その後妹が父の友人に引き取られて、大切にされていることを語り、素朴な喜びの言葉を発している。彼女の口調からは嫉妬の情が感じられない。彼女はただ妹の幸せを喜んでいる。少女は、祖母が嘆きの中に見たものとは逆のものを、人生において見ようとしている。彼女は、不幸を経験してなお、他者の幸福を自らの喜びとする気高さを保ち、また人間あるいは世間への希望を失わない。

作者はそのような少女の性格を理解し、それに価値を見出す。彼は、少女の身の上話に同情するだけでなく、その性格の倫理的価値を認める。作品冒頭、少女の抑制された語り口のなかに、不幸のなかにあってもそれを過大視せず、つねに他人を気に掛ける心があることをハーンは指摘している。その少女の心は、身の上話が終わった後、彼に畳を叩いて坐るよう望んだことにも表れる。

ところで、少女の願いにもかかわらず畳を叩か

ずに坐るという行為の描写は、和辻の論じる、当為でありかつ当為でないという、倫理というものの微妙な側面を、捉えようとしているとは言えないだろうか。ハーンが躊躇なく畳に坐り少女の不幸を取り込もうとするとき、そして他者の不幸を取り込むことが即ち他者理解であると下男萬右衛門に言わせるとき、ハーンの個人性はあきらかに否定されている。自らの苦を厭う個人的な自己は、あたかも最初から無かったかのようである。それは少女との関係性のうちに解消されている。しかしその一方で、少女の信じる土俗的信仰を尊重しつつ、その規範を現に逸脱する事において、個としてのハーンがたしかに存在するのが感じられるのではないか。

また、少女との関係性は、ハーンが少女を眺める事においてだけでなく、少女もまたハーンを見ているという事においても成立している。彼女が、己れの不幸を他人に及ぼすまいという心遣いをしているのが、すでに他人を見ていることでもある。少なくともハーンはそう解釈したがっている。したがって、ハーンの実行は少女の行為に呼応したものであり、少女の信仰の深い部分における倫理性を読み取り、自ら実践してみせたのだと言うことも出来る。もっとも少女にしてみれば、単に風習に従ったという面もあっただろう。また、それはハーンも分かっている、あえて風習に逆らってみせることに意味を見出したとも言える。風習に逆らうことが、自動化されざる倫理的行為を示し、かくて相手との関係性を新鮮に表現すると、判断したわけであろう。彼は少女の生きる表現の世界を、自覚的に生きてみせたのである。

さらに言えば、少女を家に上げて身の上話に耳を傾けるということ自体、日常における表現の世界に入り込む行為である。物語の内部における関係性に、自らも参加する行為である。少女の両親や兄はもはや生きていない。それは相手不在の関係性かもしれない。しかし関係を結ぼうとする運動の現実性は疑いようがない。身の上話が終わった時点で、ハーンと少女の家族全体との関係性はすでに生じていたと言えるかもしれない。だが、

その事が表現を与えられて顕在化するのとは規範からの逸脱の効果であろう。つまり、一家を襲った不幸の一部を少女が背負っており、それをハーンが引き受ける、そういう物語が逸脱によって新たに生じ、それによってハーンと少女の家族との関係性が表現を得る。その逸脱は、彼がすでに入り込んでいる関係性によって、ごく自然に起きた逸脱である。

あえて畳を叩かずには坐る行為は、また、人形の墓という土着的風習からも逸脱しているかもしれない。不幸を人形の墓によって避けるという風習の考えと、不幸を避けることよりも人間同士の結びつきを重く見るハーンの考えとは、対立していると言ってもいいように思う。母親の霊と少女の兄との関係の描き方には、たんに土着的風習を軽視したから復讐を受けたという以上の、積極的な意味合いがある。霊の側は盲目的な愛によって不当にも息子を奪ってゆくが、ともかくそれは愛には違いなく、他方、息子のほうは、母親への思慕ゆえに彼女の霊をみる。この関係性は、何はともあれ、関係性たるにおいて倫理的である。ただし、霊が不幸をもたらしたという事はこの作品の前提であって、作者が母親の霊の情愛をそのまま肯定したとは無論言えない。ただ、ハーンは自分の理想とする関係性の萌芽のようなものを、そこに見ている。そしてその理想の一部分を、彼は少女の苦悩を理解したい、ゆえに悲しみを背負うのだと、下男に語らせることで、明かしているように思われる。

5.

「人形の墓」に対する以上の考察から見えてくるのは何だろうか。それは、ハーンの怪談において、霊の存在は、人びとの間にあるべき人倫的關係の意識化をする上で、重要な役割を与えられているということである。霊の存在を認めることにより、登場人物たちも作者自身も（また死者たちさえも）自らをつねに関係性の中において見出さう。ハーンにおける怪談には、そのように人間

相互の関係性を把握するための、手段的な意味があったであろう。

そして、怪談の霊と似たような働きを、彼の思索的なエッセイにおける霊も有しているのではないだろうか。生者の中に潜む死者たる霊もまた、生者との関係において存在し、その各々が願いを持ちつつ、その願いによって生者との関係を結ぶ。霊は、彼ら自身がさまざまな倫理的水準の願いをもつ。彼らの願いの中には、子供を黄泉の国に道連れにしようとする恐ろしい願いもあれば、目の前の相手の苦を自らが引き受けようとする美しい願いもあるだろう。彼らがいかなる願いをもつかは決定されていない。されてはいないが、より倫理的に高い願いへの志向性が霊にはあると、ハーンは考えている（われわれが青に感じる「うれしさ」はその志向性を示していると、彼は言いたげである）。しかも、死者の願いによる支配を受けている「私」もまた、いかなる願いを抱くかの自由をもつ。しかし、その願いは「何かを所有したいという願い」ではなく、「何かになりたいという願い」であるべきである。その願いの先にあるのは、青空に似た巨大な霊になることであったかもしれない。しかし、そのような願いは日常から遊離してしまうのではなく、日常に留まり、目の前の人間の身に成り代わって、その苦悩を知ろうという形をあくまで取るのである。

【注】

- 1) *The Writings of Lafcadio Hearn*, in sixteen volumes, (Houghton Mifflin Company, 1922), vol. 9, p. 168.
- 2) *Ibid.*, p. 168.
- 3) 引用につけた訳文はすべて本稿筆者のものである。
- 4) *Ibid.*, pp. 129-130.
- 5) *Ibid.*, p. 130.
- 6) *Ibid.*, vol. 8, p. 73.
- 7) *Ibid.*, pp. 73-75.
- 8) 『和辻哲郎全集 第十巻』(岩波書店, 1962年), 11-50頁。
- 9) 同書, 26-27頁。

-
- 10) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 9, pp.143-144.
 - 11) *Ibid.*, pp.147-152.
 - 12) 牧野陽子「『人形の墓』を読む:ラフカディオ・ハーンと日本の“近代”」(『成城大学経済研究』, 72-96頁, 2014年7月)
 - 13) 同上, 83頁。
 - 14) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 8, p.102.
 - 15) *Ibid.*, p.99.
 - 16) *Ibid.*, p.98.